

# *CHAIN Focus*

*EX#4*

# About ChainFocus

「Chain Focus」とは、写真を使った新しいコミュニケーションのかたち。一言で表すのなら、写真を使った連想ゲーム。いまはしがない社会人になったハルクとはたちの2人が、2010年、大学時代にはじめた、ちいさなプロジェクトです。

写真には、表現者が表現したいテーマが存在しています。しかし、そのテーマはほんとうに写真を観る側に伝わっているのでしょうか。

自分の写真が、相手にどう捉えられているのか。相手の写真が、自分に何を訴えているのか。「ChainFocus」は、主観だけを頼りにそれを考え、伝え、そして裏切りながら写真をつなげていく試みです。

プロジェクトのルールは簡単です。2人のうちのどちらかが選んだ写真を見て、もう1人はそのテーマを連想します。そして、「連想したテーマ」と同じテーマの自分の写真を選びます。今度はもう1人が、その写真を見て、同じことを繰り返します。そしてまた、もう1人が。

テーマはときには相手に伝わり、ほとんどは、どんどんと裏切られてしまします。でも、写真は幾枚もつながっていく。そうして、ひとつの新しい「Chain」が生まれるのでです。

0

# How to Enjoy

今回の展覧会では、はたちが奇数の、ハルクが偶数の写真を展示しています。この冊子は、そのキャプション代わりになるものです。

それぞれの写真を撮影した人は、冊子の右側に、自らの写真のテーマと説明を書いています。もうひとりは左側に、相手の写真を見て連想したテーマと、解釈を書いています。

みなさんが展覧会を楽しむとき。冊子をいきなり開かずに、まずはゆっくり、その写真のテーマを想像してみてください。自分だったらどう解釈するのか、それこそまさに、「連想ゲーム」のような感覚で。

そうして冊子を開いてみれば、そこには撮影者による答えと、もうひとりによる解釈が現れます。自分が想像したものと、それぞれのズレを味わうのが、この展覧会のひとつの醍醐味です。

ズレはどんどんと広がっていきます。写真が10枚つながっているころには、はじめとはまったく違う、もしかしたら同じの、それとも少し違うだけのテーマに、なっているかもしれません。

それではゆっくりと、お楽しみください。

0

# 「再会」

この写真は、沖縄の離島で撮った写真。元気にしてた？なんて声をかけながら、海に駆け入る人たちがいる。こうやつて旅先で数年ぶりに顔を合わても、違和感はないにもない。先週あつたばかりかのように、会話もはずむ。

それはだつて、同じ場所で過ごした思い出が、お互いの共通項になつていてるから。場所が持つていてる記憶が、普段ばらばらになつていて、みんなをつなぐ。人と場所とが「再会」することには、こんな風に、大切で、すてきな意味がある。

男女が、海に向かつて歩いている。一見すると仲が良さそうだが、お互いを探り合うかのように一定の距離を保つている。そこには、心地よい南国の景色と対照的な軽い緊張感が横たわっている。一人が振り返って何かを語り出す。その一言は何かが変わるきつかけになるのかもしれない。

何かが始まるとき、何かが終わらなければならない。振り返つてみるとその節目となる瞬間が必ず存在する。この瞬間が五人にとってのそれなのだろう。だからテーマを「節目」と解釈した。

# 「節目」

# 「節目」

人生の節目となる瞬間は数多くあるが、結婚はその中でも最も象徴的なものだ。二次会が終わってゲストを見送る前のふとした瞬間。大切な人たちがまもなく扉から出てくる。そんな時に二人は何を話したのだろう。

きっと感謝の伝え方を最後まで相談しているのだと僕は思う。結婚式とそれに続く一連のイベントは、大切な人たちから自分たちが祝つてもらうものではない。人生の節目を共有することで感謝を伝えるものなのだと、この日僕は敬愛する先輩から教わった。

# 2

ハルクの写真にうつる、おそらく、きょう結婚式を迎えたであろうふたりは、初対面ではないだろう。知り合いになつてから、一年なのか二年なのか、それぞれのことが信頼できるまでの、相応の年月が経つているはずだ。

そうして二人が互いを見つめ合いながら振り返るのは、きっと、自分たちの始まりの日。どんなふたりにだって、初めての出会いというものは、必ずある。その瞬間は一点にすぎなくとも、つながり、線になつて、きょうがある。

## 「出会い」

# 「出会い」

旅は、出会いだ。この写真は、ペルーのクスコという街で撮つたもの。マチュピチュに向かう途中で経由する、標高三千米、富士山よりも高いところだ。初めて足を踏み入れたこの街には、知らない食べ物と知らない風景があり、知らない人たちがいる。

どきどきと胸が高まるのは、好奇心か、緊張感か、それとも、慣れぬ空気の薄さなのか。ぶらぶらと歩きながら、シャツラーを切る瞬間、ぼくはそんなことを考えながら、知らない街との「出会い」を記録する。

3

南米のどこかの青空市。石畳に並べられた果物と、商売つ氣のなさそうな女性たち。客が来ることを待つてているようだけれど、奥から近づく旅行客にもはたちにもあまり関心はなさそうだ。お金を払うよそ者よりも隣人を大切にしているのだろう。

全く違う人生を過ごしてきた人たちが、こうやつてある点で交差する。その交差の繰り返しがその人になるのだとしたら、交差の仕方がその人らしさを示すのかもしれない。だからこの写真のテーマを「交叉」と解釈した。

# 「交叉」

# 「交叉」

タイムズスクエア。世界で一番有名なこの場所はあらゆる人たちが交叉する。一瞬の交叉もあれば、何度も繰り返す交叉もあるだろう。

特定の誰かとの交叉が多いほどそれがずっと繰り返すと思いつがちだけど、それは間違いだ。談笑している友人も離れる時が訪れる。仕方ないことだけれど、僕は慣れることはないとと思う。交叉の一つ一つを大切にすることが誰かを大切に、そして丁寧に生きるということなのかもしれない。当然のことなのに、忘れがちなのは何故だろうか？

ハルクの写真は、きっと、ニューヨークのタイムズスクエアあたりなのかなと思う。よくよく見ると、会話に興じる人たちが手前と右奥にいて、再生ボタンを押せば、いまにも笑い声が聞こえてきそうだ。

こうしたスナップ写真の醍醐味っていうのは、やつぱり、ここにある。本当ならば川のように流れていってしまうかもしれない瞬間を、ひとコマに切り取ることに。時間を止めると言つてしまえば陳腐だけれども、つまりところ、そんな意味が込められていると感じた。

# 「止まる」

# 「止まる」

しん、と静まり返った操車場。寝台特急「北斗星」に乗つて上野から北海道へと旅する途中、函館で撮影した写真だ。こういう類の列車は、北へ向かいながら、いろいろな駅で休憩をする。ここではたしか、寒冷地用の車両を連結していたはずだ。

新幹線や飛行機で、あつという間に目的地にたどり着くことができる「旅」も、たしかに便利で、楽しい。でも、ゆるりゆるりと、立ち止まりながら目的地に向かうことにこそ、楽しみはある。北斗星は、昨年の三月に廃止された。

# 「物思い」

旅の途中、夜明け前の車両基地。赤信号で列車が止まつて待ちぼうけを食らつてている。この場にいたとき、はたちは何を考えていたんだろう。きっと、凛とした空気に包まれながら漠然と考えたことをノートに書き殴つていたに違いない。そして思い立つたかのようにシャッターを切つたのだろう。この写真を見ていると、僕までぼうつと物思いに耽つてしまふ。自分の思考に浸れる瞬間は忙しすぎる現代において嗜好品だ。だからテーマを「物思い」と解釈した。

# 「物思い」

美術館の中で子供向けの美術の講義が行わっていた。親は周りで子供達の学びを見守っている。子供達が先生の言葉に一生懸命耳を傾けて、咀嚼して、物思いに耽ることができることの時間は尊いものだと思う。もちろん、実生活で役に立つ知識ではない。それでも無駄なことでは決してないのだ。

わからないことをわからないまま、物思いに耽ることを楽しむ。インスタントな解決策ばかりもてはやされてる中で、そんな思考を味わうことを面白がれる人でありたいと、僕は思う。

ハルクの写真にうつる子どもたちは、どんな話を聞いているのだろう。みんな楽しげというよりも、興味津々なのか、不安げなのか、いずれにせよ、大人の男のひとの話にしかと聞き入っている。

ひとの話を聞くときに、ここまで真剣な表情をできるつていうのは、やっぱりひとつ、子どもの特権だと思う。知らないことがたくさんあるからか、どんなことを聞いても、驚きや、感動や、笑いを見つけることができる。子どもたちの眼差しにある、好奇心。ちょっとびり羨ましく、懐かしい。

# 「好奇心」

# 「好奇心」

空海がひらいた高野山に向かうため、多くの観光客はみんな、ロープウェーに乗る。こういう乗り物に連れられて、まだ見ぬ場所に足を踏み入れるとき、ぼくは大抵「ワクワク」する。これはやつぱり、大人になつた自分たちにも、好奇心がたんまりと残つてゐる証拠だらう。

もうひとつ。この写真、フィルムの端っこでうつされたがために、途中でふつりと切れている。ここには、どんな風景があるのだろう。なんで、切れているんだろう。そうやって気になるその感覚も、やつぱり、好奇心だつたりする。

一目見たとき、感光部に目を惹かれる。そこに何が写り込んでいるのか、今となつてはわからない。情報の欠損が故に想像力を掻き立てられる。それがこの写真をより面白いものにしている。

中央にはおもちゃのような登山鉄道に乗り込む旅人たち。ここまでどんな思いをして、そしてこの先にどんな経験をするのかはこの一瞬からではわからない。写真には見る人の解釈を投影できる余白がある。この一枚はそれを強く意識させる。だからテーマを「余白」と解釈した。

# 「余白」

# 「余白」

牧場で放牧される牛。木々は葉を散らし、冬が足音もなく訪れる。もうすぐ日が暮れる。

日が暮れるまでの僅かな時間が好きだ。空が多色に満たされるのを眺めていると、不思議と穏やかな気分になる。今日を素直に振り返つて、明日をのびのびと思い描けるゆつたりとした時間。この時間は、一日の余白なのだと思う。見落としても問題はないけど、気がつけば豊かに過ごせる。ストレスに潰される前に、生きるために余白に逃げるのも知恵なんだろうとこの時気がついた。

どこの国のどんな季節の夕焼けなんだろう。ぼくのよく知らない動物が黙々と、草を喰んでいる。きっとお腹をいっぱいにして、日が暮れれば、草原を駆け回るすてきな夢を見るんだろう。

動物は気軽で良いな、なんて思うけれど、やつぱり暑いとか寒いとかの悩みもあるだろうし、怒ることも、悲しくなることもあるはずだ。マジックアワーに最高のディナーをいただくことが、彼らにとつては至福のひと時なのだろうか。生きるつて、美しいことなんだなど、なんだかほつとする。

# 「生きる」

# 「生きる」

世の中には、いろいろな生き方がある。たとえば沖縄のある離島には、犬と一緒に毎日ちいさな船に乗り、ゆらゆらと波に揺られながら釣り糸を垂らしたり、銛を片手に海に飛び込んだりする漁師の人がいる。ヘミングウェイの、「老人と海」の主人公のように。

夕陽に浮かび上がる威風堂々としたシルエットには、何十年とそんな日々繰り返してきたからこそ醸し出せる、不思議な美しさがある。漁を終え、泡盛をたらふく飲んだ彼が見るのはもしかすると、ライオンの夢、なのかも知れない。

マジックアワーの海辺。石碑か何かの前で海から帰つてきた一人をもう一人が迎え入れている。二人は同じ方向を見つめている。きっとそこに言葉はいらない。普段から交流ができているのだろう。

コミュニケーションは難しい。非言語的な要素が大きく影響するからだ。言語化とすると、変換の過程で欠落するものが出でてくる。でもこの多色の空の下、この二人は言葉による交流を超えて、コミュニケーションをとつてているのだろう。

だからテーマを「交流」と解釈した。

# 「交流」

# 「交流」

渋谷の雑踏の中。青年がボードを掲げている。周りの人たちは足早に通り過ぎていく。無関心に晒されても青年は誰かと交流しようとボードを掲げていた。

自分が伝えたいたことが、そのまま伝わるなんてありえない。相手の解釈で意図せず別のメッセージに変わってしまうこともある。でも誤解を怖がりながらも、面白がりながらも、それでも交流しようと手を伸ばし続けるしかないのだろう。誤解を許容することは相手を許容することだと、彼の姿勢から教わった。

渋谷はあんまり、好きな街じゃない。みんながみんなを無視している、つながりがあるようで、さっぱりした場所だと感じるからだ。背中ばかりの雑踏、声をあげている孤独な男性の眼差し……。ハルクもきっと、そんなもの寂しさを感じながら、写真を撮つたのかもしれない。

写真はほんとうに、こういう繊細な場の雰囲気を記録するのに適したメディアだとも思う。そこにはさらに、シャッターを切る瞬間、写し手がひとつ考えたことが、同じように記録されている、とも。それを、想像すること。この楽しみをぼくたちが失わない限り、Chainはこれからも、続していく。

# 「孤独」

*to be continued.....*